

JSCA 賞応募のお誘い

2023年7月4日

第35回 JSCA 賞委員会委員長

山田憲明

JSCA 賞の意義と JSCA 賞表彰規則

構造技術者はプロジェクトにおいて、性能・コスト・使用性といった構造に課せられた設計条件を満たすだけでなく、時に創造性と革新性あるいは緻密さや柔軟性を持った構造設計や技術開発等によって建築の方向性を決定づけます。こうして得られた建築的な成果や実現させた構造技術者の功績は建築界のみならず社会に広く共有されるべきで、そのために最も有効な方法が表彰制度です。JSCA 賞は構造技術者を表彰する国内の賞として最高峰に位置するもののひとつです。今回で35回目を迎えますが、過去の受賞者の多くは受賞をきっかけに社会に広く認知され、その後の飛躍にも繋がっています。

JSCA 賞は「JSCA 賞表彰規則（以下、表彰規則）」に規定されています。選考は表彰規則に基づいて厳正に行いますので、熟読、同意のうえご応募ください。JSCA 賞には表彰規則にあるように、作品部門と業績部門が設けられています。ここでは作品部門と業績部門の選考に関する補足説明をいたします。

作品部門の選考

作品部門は表彰規則第3条の1にあるように、「作品賞」「奨励賞」「新人賞」を設けています。応募時点では区別なく受け付け、最終審査でどの応募者をどの賞にするかを決定します。作品部門は作品に最も貢献した構造設計者が単名で応募することが原則です。なぜならこの賞が作品ではなく構造設計者を表彰する賞だからです。一方、近年、設計体制や発注形態などの多様化が進んでいる状況もあります。例えば、優れた作品を実現した基本設計者と実施設計者の2名それぞれが作品の実現のうえで極めて重要な役割を個々に果たしていることが認められた場合は、2名が受賞対象者となり得ることも考えられます。ただし、審査で連名応募の妥当性を見い出すことができない場合、作品の善し悪しに関わらず2名とも選考に漏れることになりますので、単名応募が原則であるということを念頭に置いたうえで慎重にご判断ください。

奨励賞の対象者は表彰規則の中で「特に優れた作品を実現した構造設計者、もしくは独創的な構造アイデアの適用、地域性を活かした提案、生産性への配慮などの特定のテーマにおいて卓越した技量が認められる作品を実現した構造設計者とする。」とあります。この規則にあるように、奨励賞は構造技術者を幅広く表彰する目的で設立した賞です。仮に作品全体として特に優れていなかったとしても、部分的に秀でているものがあれば受賞対象となる可能性がありますので、奮ってご応募ください。

作品部門では、まず1次審査として書類選考を行い、通過した作品について現地審査を行います。現地審査のスケジュールは、応募作品の説明30分、作品の視察60分、質疑応答30分の合計120分が目安です。作品自体の完成形ももちろん重要ですが、現地審査では、作品の設計プロセスにおいて何を考えどのよう判断したか、応募者個人が作品にどれほど貢献しているかなどを細かく審査します。質疑応答の流れによっては深く掘り下げた議論に至ることもあるのでしっかり準備をしてください。最終審査は、応募書類や現地審査の内容をふまえて行います。

業績部門の選考

業績部門の対象者は、表彰規則第3条の2に規定されています。応募時には表彰規則第3条の2（1）～（3）のいずれに相当するかを明確にするとともに、業績が具体的にわかる応募タイトルとしてください。これまでに、本来作品部門に単名で応募すべき案件を業績部門に複数名で応募された事例が見受けられたため、注意喚起をさせていただきます。

業績部門も1次審査として書類選考を行った後、ヒアリング審査を行います。ヒアリング審査では作品部門の現地審査と同様に質疑応答で深い議論を行うことが想定されますので、説明の準備をお願いいたします。

応募における JSCA 入会の注意

JSCA 賞に応募できるのは JSCA 会員に限られます。また JSCA への入会には理事会承認が必要になります。このため非会員で応募意思のある方は、入会承認手続きの都合上、2023 年 9 月 15 日までに入会申込をしていただけるようお願いいたします。

さいごに

構造技術者は日々、それぞれが置かれた立場や環境の中で、構造設計や技術開発を行っています。その中で関われるプロジェクトの規模やかけられるコストの大小は存在しますが、どんなプロジェクトであっても構造技術者個人の創意工夫の機会は平等に存在すると考えています。大きなものから小さなものまで、斬新なものから小さな工夫を積み重ねたものまで、パウンド・フォー・パウンドの考え方で構造技術者と作品、業績を評価します。そのためには多角的な視点に基づく選考が必要で、豊富な実績と多様な経験を持つ選考委員が行います。仮に受賞に至らなくとも、作品についての整理や選考委員との議論は、必ず応募者の今後の糧になります。ぜひ日々の創意工夫の成果を我々に見せてください。そしてこれからの建築構造と構造技術者の発展に共に貢献してまいりましょう。